

漢語のエクリチュール、もしくは *visuality* を契機とするオリジナルなきコピーの多声的並列

——東アジア近現代史におけるオラリティとリテラシーをめぐって

大阪大学大学院人文学研究科 教授

宮原暁

大阪大学大学院言語文化学研究科博士後期課程

呉穎濤\*

はじめに

中国と台湾や東南アジアなど中国系住民が移民した先の国民国家との関係は、しばしば近代的な政治体制やアイデンティティに関わる用語を用いて議論されてきた<sup>1</sup>。しかし、中国大陸から台湾や東南アジアへの人やモノの移動を介して生ずる移民の現地化や土着化、あるいは現地社会の *Sinicization* は、中国と周辺地域との関係に、そうした近代の用語群で語られることを越えた政治的、文化的複雑さを生じさせている [Katzenstein, 2012: 9]。

そうした政治的、文化的複雑さは、「政治」とは何か、「文化」とは何か、といった問い直しを伴うものであるが、その問いなおしがロゴス中心主義への批判に向かうとするならば、この地域の政治的、文化的複雑さの一端は、書記言語である漢語と複数の音声言語の併存にあると言って差し支えない。アルファベットなどの表音文字とは異なり、表語文字である漢語は、複数の「ヨミ」を許容してきた<sup>2</sup>。そうした状況において、東アジアでは、西欧近代が前提とする表音文字による言文一致や、文書による国民の定義と管理が、西欧近代的な国民国家間システムのそれとは違ったものとならざるを得ないのである。

漢語が持つメタ表意性については、ライブニッツが早くから着目してきた。ジャック・デリダ [1972] は、それに基づいて近代性の脱構築について論じた。東アジアでは、柳父章 [1976]、Han-Liang Chang [1988]、平田 [1999]、齋藤希史 [2005]、林少陽 [2009] などが漢語のエクリチュールの媒介性について論じている。表音文字、アルファベットを使用する西欧近代国民国家では、規範的な音声言語と、それに基づく正書法、綴字法が整備され、識字教育を通じて人びとの間に共有されていくことで国民を生み出してきた。しかし、日本や中国など、表音文字を使用していない東ア

\* 本プロジェクトの一環として、シンポジウム「華語語系文学与口述伝統の対話」(2020年12月28日、浅草 Tokyo Bunka Hostel にてオンラインと対面により実施)にて「新中国建国による亡命ルートの(脱)フィクション化と日本におけるサイノフォン——胡蘭成(1906-1981)と陶晶孫(1897-1952)をめぐって」と題する報告を行い、本稿では、主に粵謳に関する資料の収集を担当した。

<sup>1</sup> 近代化論は、人やモノ、現象をその属性においてとらえる古典的な機能主義に即して、移民が文化的な属性を解消し、近代国家の市民に変化していくとする同化論 (assimilation theory) を生み出してきた。その後、文化的な属性を維持しつつ、政治的なアイデンティティという面で居住地のアイデンティティに合流していくとする国民統合論 (national integration theory) や、移民先と居住地の間の二重意識に光をあてるディアスポラ論 (diaspora theory) [Clifford, 1997] が登場するが、これらの議論も移民の主観に即してアイデンティティをとらえる主観主義的アプローチであると言えよう。これらに対して、構造主義的な立場から、移民のアイデンティティを国民国家間の関係のなかにとらえようとする認知論的、新制度主義的なアプローチもある。新制度主義的なアプローチは、人の移動を特権的に管理することが国民国家にとって本質的であるとする [Brubaker, 1992; Noiriel, 1996(1988); Zolberg, 2008(2006); Torpey, 2018]。国家は、移民と国民を分類することで定義され、「移民」のアイデンティティはその過程で社会的に構築されるのである。

<sup>2</sup> 兵藤は、「ヨム」ということに関して、「正確に伝承されるべき、ためにまた文字にもされる権威的な・正当的な本文などが——たとえば、漢籍、仏典、宣命、祝詞、史書などはヨまれたのである」と述べている [兵藤, 2002: 23]。

ジア地域では、国民国家を越境する漢語の媒介性を無視することができない。柳父は、東アジアに広く流通する漢語が読み手による解釈の自由度を備えていたことが、19世紀後半に東アジアに流入した西欧の近代的な概念が翻訳され、共有されるうえで、決定的な役割を果たしたことを指摘している〔柳父、1976: 20, 23-24〕。また齋藤は「漢文」というエクリチュールの可能性（漢語のエクリチュールの圏域）は、東アジアにおける地域の諸語を越えて展開したところにあるのであって、それが日本語か中国語かなどという議論は、書かれたことばが書かれたことばとして持つ可能性を、統一された国家の音声によって抹殺しようとすることになりかねない」と書いている〔齋藤、2005: i〕。漢語は、少なくとも識字層の間では、現行の国民国家の範囲を越えたコミュニケーションを可能にしてきたのである。

漢語を媒介とした多様な発話の併存は、近代以前の東アジアにおける知識人間のコミュニケーションを担保するとともに、識字層と非識字層の間に不連続面を固定化してきた。各地域の知識人は、文言を文言として、あるいはそれを音読するための言語を用いて理解してきた<sup>3</sup>。1952年まで日本において用いられていた漢文書き下し文は、そうした漢語を音読するための言語の一つであった。また、広東や福建では、広府板や孔子白といった漢語のエクリチュールを読むための、ローカルな言語と漢語を折衷した言語も生み出された。

その一方で、識字との距離がある民衆は、漢語への憧憬の念を持ちながらも、文書を用いた識字層の圧迫ないし懐柔とどう立ち向かうかといった課題に日常的に直面してきた。漢語のエクリチュールの圏域や、国民国家の範囲には、発話と解釈の様式を共有する（と想定される）、限られた範囲のアクターが関わる数多くのスピーチネットワークが存在している<sup>4</sup>。こうしたスピーチネットワークと国民国家や漢語のエクリチュールの圏域との関係は単線的ではない。スピーチネットワークは、しばしば伝統的に文字の読み書きができない、あるいは識字との距離がある人たちから構成されてきた。彼らの発話は、閩南語、客家語、粵語、呉語など、一般に「方言」と呼ばれることもあるローカルな言語でなされる（もちろん偏差も大きい）。そうした言語的な偏差の存在は、近代化をめざす中国にとって「超克すべき状況」として認識され、規範的な標準文法制定の強い動機となったとされるが〔平田、1999: 99〕、音声中心主義的な観点に基づくあるべき「國語」の制定が方言の解消ではなく、相対化によって進められてきたのも事実である。林少陽は、1920-30年代、「國語」の整備に際して、口語的で朗詠可能な各地の歌謡が収集され、それによって既存の古典文学や学問体系、それを根拠とする知の権力構造の脱構築が企図され、新たなアイデンティティ＝イデオロギーが模索された点と指摘している〔林、209: 280-283, 304-305〕。書きことばとしての漢語の通用性の下でクレオール的な多言語状況にあった中国で、「國語」は、あらかじめ存在する共通語（「官話」がある程度、そうであったとしても）に基づいて制定されたのではなく、多様な方言を照らし合わせることで生み出されたのである。

このような「國語」は、中国国民が思考や感情を表現する共通の言語となっていった。平田は、「話ことばによる濾過を経た「國語」は、抗日戦争期の民族を守る「聲」として機能し始めた」と述べている〔平田、1999: 99〕。しかし、そうした「國語」は、やがて「書かれたことば」の後ろ盾に

<sup>3</sup> この点で、荻生徂徠が「語気声勢の中華に純ならざる」「和習」（和臭）を嫌い、「秦漢以前の文章こそが中華の真正の言語である」としたことはよく知られている〔齋藤、2014: 69〕。

<sup>4</sup> ハイムズは、発話に関する行動と解釈の規則に対する知識を共有している地域社会をスピーチコミュニティと定義している〔ハイムズ、1979〕。「コミュニティ」という語が持つ領域性を排除するため、本稿では、「コミュニティ」に代えて「ネットワーク」という用語を用いる。

よって、異なる発話と解釈の様式を持つ複数のスピーチネットワークが国民国家のなかに組み込まれるうで役割を果たしていく。今日、東アジアの非識字層人口は大幅に縮小したが、中国大陸および周辺地域における「国語」（標準語）の制定により、海外に移住した中国系移民や周縁のマイノリティを取り巻く漢語と声との関係は、かえって複雑化してきている。19世紀後半から爆発的に増加する東南中国から海外への移民は、多くが広東語や潮州語、閩南語、客家語の話者であり、かなりの数が非識字人口であった。加えて彼ら彼女らは、（多くはポストコロニアルな状況にある）移民先において現地の公用語を習得する必要性にも迫られてきた。そうした漢語と地方語、移住先の公用語やバナキュラーが織りなすポストコロニアルな状況のなかで中国系移民たちは、漢語のエクリチュールと多様な声との葛藤に直面するようになったのである。

本稿では、東アジアにおけるエクリチュールと多様な声の「はざま」で、文字の読み書きができない、あるいは識字との距離がある人たちが、どのような葛藤に直面し、それを克服するためにどのような実践がなされるか、中国から台湾、東南アジアなどに移住した人たちの文学的実践などを参照しながら検討し、東アジア近現代史のコンテクストにおいてエクリチュールとオラリティをめぐる論点を整理する。エクリチュールと声の葛藤は、公式のエクリチュールが規範的な音声言語と融合することで、すなわちそれぞれの国民国家で制定された音声言語としての「国語」と正書法、綴字法の一一致が図られ、識字教育を通じて人びとの間に共有されていくことで、より抜き差しならないものとなる。そうしたなかで、オラリティがどのようにリテラシーに立ち向かうかを検討することは、文化帝国と国民国家の双方の側面を持つ中国と世界がどう対話するかという政治的な課題に答えることにもなる。

## 1. オラリティとリテラシーをめぐる概念的枠組み

国民国家間システムにおいて、文書は近代国家が移民を定義し、管理するうでクリティカルな役割を果たしてきた。この点に関して、Torpeyは、「国家が移住を承認し、規制する権利を独占したことが、国家の建設自体にとって本質的な意味を持つこと、また、国民の共同体という理念が実際に実現されるには、単に想像されるだけではなく、書類として成文化される必要がある」と論じている [Torpey, 2018:11]。文書による移民の管理は、表音文字、アルファベットを使用する地域では、容易に国家間で共有される。しかし、日本や中国など、書記言語としての漢語の遍在し、書記言語と音声言語の二重性が認められる東アジア地域では、音声言語をアルファベットを使用して記述する地域とはやや異なった仕方で移民が定義される可能性がある。それは、音声言語をアルファベットを使用して記述する地域で想定される国民国家間システムとの間になんらかの齟齬を生み出す可能性があるということでもあり、また一般的な近代国家（東アジアでとは異なった国家が想像されるということでもある。

ここで急ぎ付け加えなければならないのは、東アジアの諸国が識字ナショナリズムという点で一般的な近代国家の像とはやや異なったあり方を示すとは言え、国家間システムから完全に自由であるわけではないということである。そのことが、音声言語と書記言語のあいだの不整合と相まって、多様で複雑なアイデンティティのあり方を許容してしまうのである。

東アジアでの人の移動において、オラリティとリテラシーに着目することが重要であるのはこのためである。以下では東アジアのコンテクストにおいてエクリチュールとオラリティの二重性を論

ずるための概念的な枠組みについて整理しておこう。

### (1) 言語、Sinophone、マイナー文学

東アジアのナショナリズムを論ずる際、言語は、これまでも重要な参照点となってきた。その場合の言語は、慣習的に「XX語」「YY語」と呼ばれ、固有の音韻体系と語彙、文法体系を基準にある政治的な範囲において共有されていると考えられがちであった。しかし、たとえそれがナショナリズムを喚起する根拠として用いられるとしても、音韻や文法の体系は、コミュニティやネットワークを構成するメンバーにあらかじめ共有されているわけではない。言語的コミュニケーションにおける解釈と行動の規則は、相互行為を通じて人びとに学習されていくのであって、そこでコミュニティの成員権ということがもしもあるのだとすれば、それはそうした規則を学習する義務や権利、期待に関わっている。

Sinophone の概念が重要性を持つてくるのはこの時点である。Sinophone とは、中国語（中文）で書かれた文学作品、特に「中国」という場以外で書かれたテキストを批評するために用いられる用語である。Sinophone Literature（批評）は、トランスナショナルに広がる漢語で書かれた文学を論評する批判戦略の一つである。トランスナショナルな空間における中国文学を再構成する企てには、1980年代半ばに提唱された「華文文学」の概念があった<sup>5</sup>。しかし、華人の文学をこの概念によってとらえた場合、華人の文学は、中国（文学）と周縁（文学）の間の権力構造において周辺に位置づけられることとなる。そうした華人の文学に、マイナー文学、つまり規範的な「中国語」を母語としない人たちが中国語を用いて創作した、ポストコロニアル文学の一種としての新たな文学性を見出そうとしたのが、Sinophone Literature（批評）である [山口 2015: 22-23]。

マイナー文学とは、ドゥルーズ・ガタリによって「マイナーの言語による文学ではなく、少数民族が広く使われている言語を用いて創造する文学」と定義される [ドゥルーズ・ガタリ、1978: 27, 28]。マイナー文学の担い手であるマイノリティは、政治的、社会的、文化的に対極に位置するマジョリティの属性とその欠如を共存させた存在であると仮定し得る。マイナー文学としての Sinophone 文学は、中国語（中文）で書かれた文学的なテキストを自明のものとはせず、中国大陸外の台湾や華僑華人社会、大陸の少数民族、さらには歴史的に朝鮮半島、ベトナム、日本列島で局所的な声（オラリティ）に即して生み出され、漢語で書かれたテキストである。Sinophone 文学批評は、音韻や文法の体系を前提とした伝統的な言語の定義を脱構築し、書き言葉としての中文とローカルな話し言葉が相互に干渉し合う局面に注意を払うことで、そうした文学を、華語語系文学としてアイデンティファイし、評価することを可能にするのである<sup>6</sup>。

「文学」の概念についても一言述べておく必要がある。セルトーによれば、「文学」とは、自然科学と歴史学が使ういわゆる極めて明瞭な「単一音声」を持たないために科学から排除された、著者の感情や思索、主観的な「才能」に広い自由を許し、文学的言語を使ったテキストであるとされる

<sup>5</sup> “Sinophone” の語は、華語語系、あるいは王徳威によって「華夷風」とも翻訳される。王によれば、“Sinophone” の語は、1990年代に登場するが、今日の Sinophone 文学批評に直接、関わる用法としては、2007年に史書美が *Visuality and Identity* において提唱したのを端緒としてとされる。これと同時に、石静遠、張錦忠などの論者（もちろん王徳威もその一人である）が必ずしも同じ立場からというわけではないにせよ、この語を用いて幅広い議論を展開したという [王、2016: 3]。

<sup>6</sup> 本プロジェクトの一貫として、台湾国立中山大学の張錦忠氏に行ったインタビューのなかで、張氏は、日本語で書かれた文学テキストなど、一見、中文のテキストに見えないものの、漢語が用いられているテキストが、Sinophone の概念で把握し得るか否かは定義によると述べている。Sinophone は、マイナー文学と親和性の高い概念であり、あるテキストを Sinophone として読もうとするか否かが重要なのである。

[Clifford, 1986: 5 におけるド・セルトーの参照]。マイナー文学のテキストは、明瞭な「単一音声」を持たないが、この点は漢語のテキスト一般に当てはまる特徴でもある。口語による文学を提唱した 1910 年後半における文学革命は、漢語のテキストの多声性に対する批判と捉えることもできるが、同時に中国の知識人が伝統的に文学と科学、とりわけ社会科学や思想を近い関係にあるものとして捉えていたことを示唆している。いずれにしても、小説や詩といった「文学として読まれるテキスト」と、それが社会のなかにおいて占める位置づけが、東アジアにおける漢語のエクリーチュールと西欧近代的な科学のアリーナとでは異なっている可能性があることには注意が必要である。下の表は、大庭脩『漂着船物語——江戸時代の日中交流』に掲載された漂着船の役職名簿である。漢語に、実際に船員たちが口語として用いていた漳州音のルビがカタカナで振られているが、このことは、書記言語としての漢語に、漳州音、日本の音読み、さらに官話の音韻など、複数の音声を重ね合っていることを示唆していて興味深い。

杉 板 工	総 官	財 附	亜 班	頭 舵	舵 工	夥 長
-------------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

大庭脩 2001『漂着船物語——江戸時代の日中交流』岩波書店  
西川如見『増補華夷通商考察』巻2 唐船役者項（漳州音）

**Sinophone** 文学批評は、書きことばとしての中文と、単一音声的ではないローカルな話しことばが相互に干渉し合う局面に、どのように注意を払うのだろうか。**Sinophone** 文学の主要な論者の一人である史書美は、中国大陸から海外へ移住した人たちや中国国内のマイノリティの言語のヘテログロシヤ的な性格に着目し、彼らのコミュニティと文化をそれぞれ **Sinitic-Language Community**、及び **Sinitic-Language Cultures (SLC)** と定義している [Shih, 2013: 7]。Sinitic-Language は、Sinophone の言い換えであり、相互に矛盾しながら関連しあう異なる植民地形成、移動、華語の拡散に関する歴史的プロセス、あるいは「華」や「漢」といった語で表現されるような、漢族の想像された規範的な属性とともに、他のエスニシティとの間の相互作用によって生み出されるというのである [ibid.: 7, 8]。

ここで注意すべき点は、史書美が **Sinitic Language**、ないし **Sinophone literature** と呼ぶカテゴリーが必ずしもマイナー文学の定義に即していないということである。ここでも伝統的な言語の定義の強い影響を確認することができる。史書美は、**Sinitic Language** をヘテログロシヤとしつつも、規範的な「中文」とは別の固有の音韻と文法の体系を備えた音声言語として定義し直し、ロゴス中心主義的な学術的なアリーナに再度参入させている。史書美は「ある国民国家における **Sinitic-Language Cultures**、及び **Sinitic-Language Community** の非ディアスポラの、地縁的な性質」を移民先国民国家の多文化主義の不可欠な部分として前景化する [ibid.: 7]。そうすることで中国系移住者やマイノリティの言語は、規範的な漢語帝国主義に拮抗する手段となり得るのである。

もしも **Sinitic Language**、ないし **Sinophone literature** をマイナー文学の定義に即してとらえるならば、**Sinitic-Language Cultures**、及び **Sinitic-Language Community** は、漢語とそれが許容するさまざまな異音 (allophone) の対話において理解しなければならない。その際、このカテゴリーが脱領域的であることは十分に意識すべきである。この点で、中国系移民やマイノリティを研究対象とする人類学者や歴史家の多くは、ある属性によって対象を同定し、対象を小さなカテゴリーに細分化し、論点先取の誤謬に陥りがちであった（この点については後述する）。ある特定の個人や集

団が厳密に Sinitic-Language Cultures、及び Sinitic-Language Community のカテゴリーに属しているか否かは問題ではなく、中国系の移住者や中国国内のマイノリティを漢語とそれが許容するさまざまな異音 (allophone) の対話のなかに捉えてみることで、中国系の移住者や中国国内のマイノリティのある側面が説明できることが重要なのである。

## (2) シニフィアンの多声的並列と「対話」

では漢語と異音 (allophone) の間には、概念的にどのような対話を認めることができるのだろうか。ここではカナダのフランコフォンに照らしながらシニフィアンの概念を用いて説明してみよう。なおここでの知見は、本プロジェクトの一環として、2020年12月に実施したシンポジウム「華語語系文学と口述伝統的対話」における羽生敦子氏の「アロフォン作家とケベックのフランコフォン文学——日系カナダ人作家 Aki Shimazaki がフランス語で描く日本語名詞タイトル小説の数々」というタイトルでの報告と、それに対する石橋正孝氏のコメントから示唆を得ている<sup>7</sup>。

カナダ・ケベック州では、間文化主義に基づき、フランス語と他の言語との対話による文学的創作が政策的に奨励されてきた。しかし、「マイナー文学」の概念に即して言語をパロールのレベルでとらえるならば、そこで生じていることは、さまざまな「声」の交雑というべきである。ここでの「声」とは、発話や沈黙、書かれたテキストに限らず、意味を伝える可能性を持つさまざまなシニフィアンと暫定的に定義することができる。この意味でフランコフォンは、当初、そうしたシニフィアンの並列にすぎない。それが「フランコフォン」として認識されるようになるのは、「フランコフォン」が周囲のシニフィアンを「異音 (allophone)」として定義し、許容することで、「規範的なフランス語」としての特権的な地位を回復することによる。この点に関して、石橋正孝氏は、上記シンポジウムにおいて「カナダにおいて多文化主義的には one-of-them に過ぎなかった「フランス語」(のシニフィアン) が、周辺にアロフォンを許容し、配置することで、「規範的なフランス語」としてその輪郭を強化してきた」と指摘している。フランス語と他の言語との「対話」は、シニフィアンの並列が「規範的な中文」と「異音 (allophone)」に分化し、その間にある種の権力関係が導入されることを含意しているのである。

このような対話のモデルを漢語と異音 (allophone) の関係に当てはめるならば、Sinophone もまた、一方でさまざまな「声」の並列といった側面を持ちながら、他方で規範的な中文の特権的な地位が生じるプロセスのなかにあることに気づく。Sinophone は、中国における書記言語を後ろ盾とする音声言語としての「普通話」の標準化とトランスナショナルな展開への対処をめざしたものであったはずだったが、中国系移民や国内のマイノリティが彼らの「声」を「異音」ないし「Sinophone」として再定義することで、中国大陸の音声言語としての中文は特権的な地位を確固たるものに変えてしまうのである。史書美が「ディアスポラ概念が中国を起点とする主権国家の境界を越えた規範的な知識の広がり」と、そうした広がりの中での権力構造を強化している」と批判しているのはこの点を指している(そこで生ずるヘゲモニーについては後述)。

ここで改めて注目すべきことは、書記言語としての漢語と音声言語の関係である。中国大陸におけるさまざまな音声言語の存在は、それ自体、シニフィアンの並列という状況を生み出しているが、

<sup>7</sup> シンポジウム「華語語系文学と口述伝統的対話」(2020年12月28日、浅草 Tokyo Bunka Hostelにてオンラインと対面により実施)。

その一方で書記言語としての漢語も、視覚的なシニフィアンとなる。それぞれの音声言語は、識字率の低かった時代においても漢語から自由であったわけではないが、白話革命や簡体字の導入によって識字率が向上していくにつれ、視覚的なシニフィアンを契機として「対話」、すなわちどのシニフィアンが「規範的な音声言語」となり、「異音」となるかをめぐって格闘する。そうしたなか普通話とは漢語のシニフィアンと他を排除して結びつくことで、特権的な地位の基礎を築いていったのである。この意味で漢語は、すでに前近代の東アジアにおいてシニフィアンの並列を可能にする条件となってきたとともに、局所的な国民国家の形成に伴い、特定の音声言語の規範性を担保するのを助けてきたと言えよう。

### (3) ディアスポラと反ディアスポラ

中国系移民とその子孫のアイデンティティや属性をめぐって錯綜してきた感のある、中国大陸から周辺地域への人の移動に関するこれまでの議論は、このような規範的な中文と「異音」の分化に即して整理を試みることができる。

すでにみてきたように史書美の *Sinophone* 文学批評は、規範的な中文によって周辺に位置づけられた「異音」が、新たな言語や文化として領域的にカテゴライズされ、最終的に規範的な中文と同等の特権的な地位を得ることを要求している。その際、史書美が仮想の敵として批判の対象としたのがディアスポラ概念である。

ディアスポラ概念は、もともと対象を境界で区切られた共同体や、中心、周辺、地域など物理的な場所として認識する古典的な *localizing strategies* とは異なった仕方によって、コンタクトゾーンにおける移民やマイノリティの経験を把握する戦略であった [Clifford, 1997: 245; MacKeown, 2001: 3]。しかし、マイナー文学概念とも通ずるディアスポラ概念は、しばしば二つの、一見、正反対の方向からの批判にも見える議論から挑戦されてきた。一つは、中国系移民とその子孫が中国文化や *Chineseness* を維持しているという議論であり、Francis L.K.Hsu の心理人類学的な伝統を継承した杜維明の文化中国論などがそれにあたる。もう一つは、中国系移民とその子孫が海外の移住先において中国大陸とは別の文化や *Chineseness* を持つという議論で、自らも中国系移民やその子孫である歴史研究者や人類学者、アクティビストなどの主張である。後者の一部の論者は、前者の議論をディアスポラ論として批判の矛先を向ける [Tan, 2013]。

これら二つの主張に対しては、研究の対象を「中国文化や *Chineseness* を維持している人たち」に予め限定する論点先取の誤謬の可能性を指摘し得る<sup>8</sup>。しかし、研究者自らが中国系移民やその子孫と呼ばれ得る人たちである場合、この点は問題にされない傾向にある。彼らにとって、研究対象は個人ではなく、自らもその部分である自明の人的なネットワークだからである。

一方、ディアスポラ論に対するこれら二つの批判の相違点は、それぞれが前提とする文化の定義に関わっていると考えられる。人類学では文化を「人が社会を構成するメンバーとして習得した一揃えの行動や思考であり、これを用いて、人は自分たちが住む「世界」に適応し、「世界」を変容させる」と定義してきた [Schultz and Lavenda, 2001]。そこで「社会を構成するメンバー」は、フェイス・トゥ・フェイスの関係を特徴とする比較的小規模な共同体の成員が想定されることが多か

<sup>8</sup> 1989年に筑波大学で行われた華僑華人に関する国際会議で上田信は、「あるカテゴリー（たとえば華人）を用いて対象となる人々の文化的アイデンティティなどを論じてみてもその結果は予め出されているようなものである」と述べている [上田, 1992: 90]。

った。このため社会構成主義的な立場から「文化」が社会的に構築されるプロセスを解明しようとする際であっても、小規模なコミュニティにおいて文化が構築されるプロセスを研究する場合と、移民のコミュニティで「中国文化」や「客家」の文化などが表象されるプロセスを研究する場合とは、自ずとその論じ方に差があった。移民のコミュニティが固有の文化を表象するのは自然な反応だが、「中国文化」や「客家」の文化を表象するのは大きすぎるというのである。この意味で中国系移民とその子孫が海外の移住先において中国大陸とは異なる固有の文化や **Chineseness** を持つという議論は、基本的に人類学のこのような想定に即した議論であると言える。これに対して後者の議論が前提とする文化の定義は、人類学が想定する「習得した行動や思考に関する特定の伝統」

[Schultz and Lavenda, 2001]<sup>9</sup>より広い。対面状況に文化が表象される単位を見いだそうとすることに、人類学の、あまり根拠のない前提が潜在しているのだとすれば、ディアスポラの概念を本来の脱領域的なカテゴリーに復帰させることを試みながら、中国系移民やその子孫たちが人類学者が想定する以上に大きな規模の社会的実体に彼らの「習得した行動や思考に関する特定の伝統」を見いだしている可能性を想定しておく必要もあろう。

この最後の点について、どのような文化のカテゴリーが中国系移民やその子孫たちによって想定され得るのだろうか。この点に関して、**Sinophone** を論ずる上で歴史的なプロセスに着目し、史書美よりも大きな規模の社会的実体を想定しているように見える王徳威の議論を参照してみよう。

#### (4) 王徳威の **Sinophone** 文学批評

史書美が中国系移住者やマイノリティの言語を規範的な漢語帝国主義に拮抗する手段ととらえるのに対して、王徳威は、ディアスポラ研究の核心にある価値に従って、**Sinophone** 文学作品を中華と周辺の間にも歴史的に現れた多声性のなかに位置づけ、書きことばとしての中文と、ローカルな話しことばの「対話」の可能性を強調する。領域的な概念である「周辺」を脱領域的な概念であるコンタクト・ゾーンに置き換え、規範的な中文と、それによって複数の発話や表象、解釈を伝える、いくつもの声の間に「対話」を見いだそうというのである [王、2006: 3]。

華語語系文学は、中国と海外の文学を融合する新たな用語というよりは、弁証法の出発点である。華語語系文学は、それゆえ海外華文文学の単純な言い換えではなく、その範囲は、海外から始まり、大陸の中国文学を包摂し、両者の対話を生み出すのである。

このように王徳威は、規範的な中文と、いくつもの声が交錯する「対話」の場に、近接的なコミュニティを越えた中国系移民やその子孫の文化を見いだそうとしていると言えよう<sup>10</sup>。

だがここで再び音声言語を中心とした言語が問題となる。王は、漢語、華語、華文、中文などどう呼称するかはともかく、時と場所で変化し、口語方言や様々な雑音を含んだ言語を対話の最大公約

<sup>9</sup> Schultz と Lavenda は、大文字から始まる「高度に特殊化された遺伝子プログラミングに頼ることなく、種として人が生存するため、さまざまな行動や思考を創造したり、模倣したりする能力」としての“Culture”と小文字から始まる「習得した行動や思考に関する特定の伝統」としての“culture”を区別している。

<sup>10</sup> 中国を起点とする主権国家の境界を越えた規範的な知識の広がり、それによる権力構造の強化（中国を中心としたトランスナショナルな中文世界における、台湾、香港、華人社会の周辺化）を厳しく批判する史書美の議論は、中国の文学研究者、および中国政府が警戒するところとなる。これに対して王徳威の議論は、「国家的な」中国文学、さらには「国民文学」そのものの権力性の解体をめざしつつも [Tsu and Wang, 2010: 5-6]、中国大陸における文学的創作と、海外の華人による文学的創作の間での対話を強調する点で、中国の文学研究者、および中国政府にとっても受け入れやすいものとなっている。

数とみなす。しかし、漢語のエクリチュール（あるいはその不在）がそうした言語に対して持つシニフィアンとしての性格については、必ずしも明確に意識されていない。「オリジナル」の中国文学と Sinophone 文学の間の質の高い低い歴然としている」と王が述べる時 [同上]、そこでの「対話」は、やはりシニフィアンの並列ではなく、書きことばとしての漢語を後ろ盾とする「規範的な中文」と「異音 (allophone)」が分化し、その間にある種の権力関係が導入されることを含意してからである。Sinophone がオリジナルに対するコピーであると言うならば、「対話」は、中心的な権力の強化のため、限定的にしか用いられないのである。

#### (5) オリジナルなきコピー

ここで私たちの多くは、ヘゲモニックな秩序を解体する「オリジナルなきコピー」というボードリアルの概念を思い浮かべるかもしれない。オリジナルに対するコピーとしての Sinophone という点について、史書美は、「コピーはコピーであって、オリジナルではない」と述べ、オリジナルである単一言語的な普通話（北京標準語）と単一論理の中国性を皮肉たっぷりに挑発している [Shih, 2007: 5]。

Sinophone は、より雑であったり、繊細であったりするコピーであって、消費するのが困難である。サクセスフルな消費とは、単一言語的な普通話（北京標準語）か単一論理の中国性、あるいは単一の中国と中国文化という観点から見て申し分のない完結性を意味する。

ここで史書美が示唆しているのは、オリジナルに対するコピーというヘゲモニックな視点では、コピーとしての Sinophone 的な表象を正当に評価することはできないということである。王徳威が Sinophone 文学テキストを単にオリジナルに対するコピーと位置づけているとすれば、単一論理の中国性に対する史書美の皮肉は、王にも向かう。逆に書きことばとしての漢語のエクリチュールに、コピー相互の対話を媒介する媒介項としての役割を見出しているのだとすれば、王徳威は、そうしたコピーに、Sinophone 文学批評の対象を正しく発見しているということになる。

コピーは全体性と一貫性の幻想を打ち砕く。コピーとしての表象は、Sinophone 的な文化的生産の文字通りの記述となり、それゆえにより激しく metarepresentational で、ボーダレス化した世界で非正当性の流れに直面する [Shih, 2007: 6]。

Sinophone 文学は、単一論理の中国性、あるいはその他の単一コミュニティの文化として消費することが困難であるところに、すなわち「真正性」を否定した「まがいもの」としての性格にその真髓があるのだ。

もちろん、こうした漢語のエクリチュール、さらには史書美が着目する Sinophone の映画やアートなどの視覚的な表象は、オリジナルなきコピーとしてのローカルな声を媒介するだけでなく、漢語のエクリチュールや visual そのものがオリジナルな声を持つことで新たなヘゲモニーを生み出す可能性もある。史書美はこの点を懸念して、次のように述べている [Shih, 2007: 6]。

ここに中心的な緊張が生ずる。Sinophone が言語的境界をたどる反面、Sinophone の映画とアートは、視覚的な作品として、それらをグローバルに解放し、同時に、「中国文化」として知られるものに対して、変化に富んだスタンスをとる。

Chineseness を脱標準化する Sinophone と、美しい異国情緒としての中国の違いはほぼ失われる。言語的な特定性なしのヴィジュアルは、言語とコミュニティを超えた消費に道を開く。こうしてビジュアルは、アイデンティティの闘争を明確化する道具やフォーラムとなることが目立ってきている。

以上、東アジアのエクリチュールとオラリティを論ずるための概念的な枠組みを検討してきた。以下では、ここで論じた概念を用いながら、漢語のエクリチュールや、それに代わる *visuality* の周辺にどのようにオリジナルなきコピーが配列され、中国系移民を契機としたアイデンティティの多様化を生み出しているのかについて記述してみよう。

## 2. オリジナルなきコピーたち

### (1) 台湾と馬華台湾文学

標準性と正当性の亀裂をもたらす、オリジナルなきコピーが配列される場の一つに台湾がある。下の写真は漢字を用いたオブジェである<sup>11</sup>。



写真1 「愛」の文字を2つの異なる仕方で分解したオブジェ（高雄市）



写真2 「柳」の字を分解した食堂の屋号（台南市）

台湾文学史における郷土文学論争は、漢語のエクリチュールと多様なローカルな声との干渉の表れの一つである。それは日本植民地統治から中華民国政府の遷台に至るプロセスのなかで、「オリジナル」であることを主張するようになった中文と、配列されたコピーとしてのローカルな声とのせめぎ合いである。Zhong Zhaizheng（鍾肇政）は、この点をめぐる葛藤について次のように述べている。石静の本からその箇所を引用してみよう [Tsu, 2010: 11]。

<sup>11</sup> 国立台湾文学館（台南市）では、街路の文字列を文学テキストとして読む展示も見られる。

家庭の話しことばでは、客家と閩南を話し、公学校では日本語を学ぶことを強いられる。中学校に入る頃には、日本語で思考するようになる。現在、書くときには、日本語を捨て、中国語で書くようになり、思考も中国語でするようになった。

しかし、問題も出てきた。書くとき、私は中国語で考え、書いている。そうすべきであり、それに対して異議を唱えるいわれはないが、会話の箇所になったとき、大きな違いがある。私の物語の人物が何かをいうときの言語は、それを書くときの言語とは明らかに別の種類である。これら二つの言語の間で、私の書き物がある種の翻訳のプロセスを伴っていることを言うことなしに、このことは進んでいってしまうのである。

上の文章は、文化的な確信と土着性を持った言語システムを見出すことがいかに困難であり、そうした困難さが文学創作の動機ともなっていたことを示唆するとともに、漢語のエクリチュールが、そうした閩南や客家、あるいは日本語などのローカルな声を十全ではないにせよ媒介し得たことを暗示している。

このようなローカルな声と漢語のエクリチュールの間で執筆をおこなった作家には、李永平、黄錦樹などの馬華台湾文学の作家たちを数えることもできる。彼らは、閩南語、客家語、潮州語、広東語などのローカルな音（声）のみならず、マレー語やダヤク語といった生まれ育ったマレーシアの言語の音（声）を、漢語のエクリチュールに託す（表1）。

表1 李永平が小説に用いた漢語の例（ここでは音は普通話の音を参照しているが、漢字の発音が必ずしも普通話であるとは限らない。）

巴刹 (ba sha)	pasar
巴仙 (ba xian)	percent
特里瑪卡謝 (telima kaxie)	terima kasih
伊布 (yi bu)	ibu
多哟达 (duo you da)	トヨタ

李永平は、おそらくは漢語識字層の多くが知らない漢語を探し出し、サラワクでの経験を言語にしている。下線①の漢字の発音は、ji であり、小説においては、ものを切る時の音を表現している。ji は動詞であり、ものを切り、刺す意味がある<sup>12</sup>。漢字の右半分は「刃物」を意味する部首であり、視覚的にも刃物のイメージを持つことがわかる。また下線②の「爨」という漢字の動詞としての意味は火をつけてご飯を炊くことであり、名詞としての意味は料理用のかまどである<sup>13</sup>。漢字の形から見れば、「爨」の上の半分は鍋で、下の半分は火で、視覚的に火でものを煮る形をしている。

<sup>12</sup> 商务印书馆辞书研究中心 1998《古代汉语词典》商务印书馆。

<sup>13</sup> 现代汉语大辞典编委会 2007《现代汉语大辞典》上海辞书出版社。

李永平 (2012) 《大河尽头・溯流》上海人民出版社 36 頁

這群爪哇工人……每走到一顆橡膠樹旁就停下腳步，剗——擦——往那刀痕斑斑的樹身上操刀一割……滿園子刀光閃爍飛迸，①剗擦剗擦。

李永平 (2012) 《大河尽头・溯流》上海人民出版社 63 頁。

四處飄漫著隔壁大巴剗傳送來的各種氣味，辛辣、腥膻、酸腐，一股腦兒羸混在河畔那一灘灘陳年尿洩中，攪拌成一大鍋中年②蒸爨在烈日下。

\*いずれも繁体字に変換している。

台湾郷土文学や馬華台湾文学の漢語テキストは、胡蘭成、朱天心といった名文家のテキストに比して、もどかしさを伴うものなのかも知れない。だが、そのもどかしさにそのものが、まさにローカルな声と漢語のエクリチュールの間で創作された Sinophone 文学の真髄なのでもある。

## (2) 唸歌

このようなローカルな声と漢語のエクリチュールの間にある隙間は、形は違えど、閩南語の語り芸である「唸歌」(liām-kua) の中にも見出すことができる<sup>14</sup>。月琴を伴奏として、閩南語に恒春調などの独特の節回しをつけて語られる「唸歌」は、テキストの全てを漢語で表記できるわけではない。下記のテキストでは、漢語で表記できない箇所が教会白話字で表記されている。

丁秀津「辛酉一歌詩」 [翁、2014: 134]

Hoah, 頭殼 kāi 割了離, 順 sòa kāi tih 題詩。

題有四句詩 ah:

「五祖傳來 i.....ih, chit 首詩,

不能露出 ah chit 根基,

多望兄弟 ah 來指教,

記憶當初 eh....., ah 子丑時

當初 eheh, 子丑時。」

林有理, tī 唐山 teh 做官,

探聽台灣 leh 反亂 nah,

五人點兵過來 beh 平台灣。

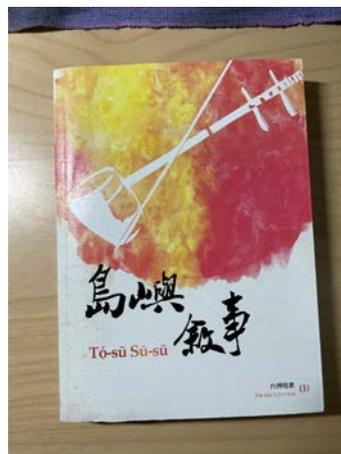


写真3 《島嶼叙事》の表紙 [翁、2014]

楊秀卿「勸賭博」から抜粋 [周定邦・林裕凱 (編)、2019: 60]

Hit-lo khah 大 ê tāi-chì iah kán 做 lò, 家庭 tiòh ē chit-le hoe-ko, 解勸朋友 a hit-le 少年嫂, iah chit 款頭路 a m-thang òh a, 少年 nā 是 a chòe 差錯, lán ài 修善改惡事 tiòh 無。

<sup>14</sup> 唸歌の著名な「歌仔先」(演者)には、陳達、呂柳仙、邱鳳英語、黃秋田、吳天羅、楊秀卿などがある [周定邦・林裕凱 (編) 2019]。

Hit kóa sī 細 ē kò a 人 he sī 大怨, iah 是為 kiáu 起出禍端 a, tak-ke m-thang òh chit 款, kiáu-á nā mài poah tiòh toân-oân e i-i.

唸歌は、朱天心などのモダニスト作家が書くような複雑な内容を語ることはできない。日本統治期と中華民国期を通じて、政治的なことを語る閩南語や客家語の語彙の使用が制限されてきたからである。しかし、そこにはそうしたことを語ることでできないもどかしさがかえって滲み出る。「唸歌」の、3音節+4音節を基調とする切々とした節回しは、それだけで聞く者の落涙を誘うが、それは規範的な中文で表現できるだろうことと、閩南語で表現できないこととを二つ並べて想像した際により強い感情となる。この点で「唸歌」は、ちょうど明治期の言文一致政策によって押し出された声を浪曲の節と啖呵が吸収したように、近代化によって声を失った人びとの声を代弁する芸能だと言えよう。そこで漢語のエクリチュールは、抑圧的な音声言語（中文であったり、日本語であったり）を人びとに想起させるとともに、漢語のエクリチュールの向こう側に、同じように失われたいくつかの声を想起する契機となっているのである。

### (3) 番客歌

抑圧的な音声言語とローカルな声の葛藤は、「唸歌」と同様に3音節+4音節を基調とする福建省の番客歌にも見られる。番客とは閩南で海外への移住者、すなわち華僑のことを指し、番客歌とはそうした華僑に嫁いだ女性を憐れんで歌った歌である。台湾の「唸歌」とは異なり、政府や列強帝国主義に対する不満と批判が盛り込まれている。さまざまなタイプの番客歌が存在した可能性があるが、今日の共産党政権下で収録され、記録されるのは、右派政権を批判し、左派的な主張を持つもののみであると考えられる。とはいえ、不満の矛先が自分達の送金が政府によって掠め取られていることに向かっているのは興味深い。そのことを勘案すると、書き言葉では歌詞のように書かれているものの、実際の音声では、より政府への批判が鮮明だった可能性もある。漢語で書かれたエクリチュールは、総じて多くのことを省略する傾向があるとされる（族譜、親族呼称、地方志）。漢語のエクリチュールを一つの契機として、さまざまなローカルな声の盛り込まれた可能性があるのだ [舒平（編）、1993]。

#### 「番客歌」（雪梅思君調）

唱出番客有只歌 番邦趁食无投活  
為着生活才出外 離父母 離某子  
五年八年返一 pái 做牛做马受拖磨  
想着某子一大拖 勤儉用不敢開半河

（番客は、両親や妻子と別れ、海外に生活の糧を求める他に生きる術はない。長年、汗水たらして働いて、僅かなお金も儉約し、妻子を楽にさせたいと思うのだ。）

欣羨番客起洋楼 賣田当地来計較  
不知政府拙然臭 了銀錢歲空頭  
變龟變鼈才去到 受尽艰难无处哭  
帝国主义食咱到 受压迫不值一只狗

（番客が地元のために一派な建物を建て、田畑を売るのが羨んで、政府は賄賂をむさぶりとろうとする。帝国主義の圧迫に誰もが苦しむ。）

土人爱走单水价 其实寄钱真艰巨

卜寄唐山一张批 受剥削无处说

卜趁几文真无会 寄到咱厝缩体体

政府赚钱定歹例 不愿寄即厝真狼狽

(政府が妨害するので、故郷にお金を送るのは、とても困難なことだ。)

内外压迫真惨切 国家腐敗地步低

政府将咱来出賣 受苦气 无处说

华侨不可受骗迷 帮助革命出经济

人人生活才好过 在国外咱才会好勢

(国内外の情勢は悲惨な状況で、国家は腐敗している。政府は、私たちを売り出している。華僑は、騙されずに、革命を援助する。そうすれば人々の生活は良くなる。外国の私たちも良くなる。)

### 「番客甬来娶」

(一)

父母主意嫁番客、番客无来娶

一年一年大、在家中受拖磨

无時通块活(无錢通块活)、兄弟一大拖

輕重總着我、但得无兜劃(等得无投活)、抽籤共卜卦、

下神托仏保庇我君恁着緊来娶(夏神托仏保庇我君赶紧返来娶)。

(両親が番客に嫁ぐことを望んだが、番客は娶りにこなかった。一年また一年と経ち、家で働いたが生活は立ち行かなくなってきた。神様、願わくば早く君が帰ってきて私を娶るように。)

(二)

瞑時愛眠夢、相思病即重、請先生无采工、愈医愈沈重、

君恁在番邦、要看總无人、误阮守空房、不時目箍紅、

勸恁姐妹千万不要嫁着番客翁

(目を瞑ったら想いは募る。どうか私のために浪費をしないで、恋煩いは重くなる。あなたは国外にいて、私が人のいない部屋で涙に暮れていることを知らない。どうか姉妹は、番客に嫁がせないように。)

(三)

冬天北風寒、瞑時又无伴、

愛我君无處看、瞑日守孤单、

君恁啥心肝、不肯返唐山、

難得見君見、割吊忤心肝、

何時会得我君返来共我来做伴。

(冬の北風は寒く、ともに眠る人もいない。会えないあなたに、私の心は引き裂かれる。あなたはいつになったら帰ってくるのだろうか。)

(四)

君恁不返時、误阮病相思、

請先生无药医、我想敢会死。

想着泪淋漓 举笔来写书

写有几句詩 寄从邮政去

何時会得我君返来共我即心欢喜

(あなたが帰ってこず、思いは募る。どうか私に構わないで。いっそ死んでも構わない。涙に暮れて、筆をとって手紙を書く。いくつかの言葉を書いて送る。いつの日かあなたが帰ってくれば嬉しい。)

このような番客の主要な渡航先はフィリピン諸島であった。福建省南部（閩南地域）の代表的な僑郷土の一つである晋江から海外に渡った移民のうち約7割の65万人がフィリピン諸島への移民であり、逆にフィリピン諸島における中国系移民とその子孫の3分の2が晋江出身だと言われている。

番客歌にも見られるように、フィリピンに渡った番客は、故郷に残された母親や妻に「僑批」と呼ばれる送金付きの書簡を送る<sup>15</sup>。当時、海外から福建省への送金手続きを請け負う僑批局は、フィリピン地域からの送金を担当する宋幫と、それ以外の地域からの送金を担当する洋幫が別れており、フィリピン諸島から晋江地区への送金がいかに大きな比重を占めていたのかが窺える。

今日、物質として残っている僑批は、送金に伴う書簡の部分である。送金されたお金は、封筒（封）の中に入れられるのではなく、送金業務として僑批の郵送とは別に行われる。

僑批には封の中に箋が封入されていない「無箋」のものも多い。僑批は、漢語の読み書きのできないフィリピンに渡った中国系移民（番客）の代わりに代筆を専門とする書読員によって認められ、同じく読み書きのできない故郷の家族に、配達員が読み聞かせることがしばしばであった。僑批の封の表には、送金額と宛名、差出人がすでに明記されており、そうした漢語のエクリチュールは、番客と故郷に残された妻（番客嬢）の間の複雑な感情に関する、それぞれの側の「声」を許容しているのである。

#### （4）粵謳

閩南語の唸歌や番客歌と同様にローカルな声による文学に粵語（広東語）による粵謳がある。粵謳は越謳、あるいは「広東調」とも呼ばれる。粵謳は、清朝康熙帝時代に王隼が創始し、嘉慶・大光時代に馮渠や趙子勇などの文人が継承したと言われている。もともと珠江の花船や遊郭の遊女が歌う恋歌で、客を歓待する歌であり、遊女を哀れむ声でもあったとされる [朱、2017]。

粵謳が唸歌と異なるのは、粵謳が20世紀の初頭に梁啓超らによって、体制批判や政治的な議論をするための道具として用いられた点にある。梁啓超は、1903年から1905年にかけて新たに創刊された『新小説』に廖恩燾が創作した粵謳を掲載している [同上]。ローカルな文体と声を伴う民間の歌謡であったものが、まさにその声の力によって、古い体制の打破をめざす文学創作に、新鮮な文体や語彙を提供したのである。こうした新たな粵謳を姚は「新粵謳」と名づけ、次のようにその意義を述べている [姚、2017: 59]。

<sup>15</sup> 晋江檔案局（編）2013《晋江僑批集成與研究》九州出版社、本書編委会（編）2016《閩南僑批大全》海峡出版發行集團（全15卷）、福建檔案館（編）2017《福建僑批檔案文獻匯編》國家圖書館出版社（全25卷）を参照。

「新粵謳」は、時代の民謡、啓蒙の民謡とも言え、テーマと宣伝目的が明確で、新小説の一般的な方向性に合致している。文体の面では、当初の「新粵謳」の柔らかで優しい文体から、剛健でピリッとした大胆な文体に変わり、内容の面では、恋愛を書くことから、時代を書くことになり、国民と新しい国家を啓蒙するという重要な任務をこのジャンルに与えることになり、大幅に主題が拡大された。新粵謳は詩的革命の大きな成果である。

もともとの粵謳は、粵語の話者にとって心に響く「歌」であった。たとえば月琴を奏でながら李銀嬌が歌った〈桃花扇〉は次のようなものである<sup>16</sup>。

桃花扇，寫首斷腸詞，寫到情深扇都會慘悲。我想命冇薄得過桃花，情冇薄得過紙，紙上嘅桃花，薄更可知。君呀，你既係會寫花容，先要曉得花的意思……………

桃花扇は、心に響く歌詞の詩だ。愛が深いと扇もみじめになる。人生は桃の花ほど薄くなく、恋は紙ほど薄くないと思うが、紙の上の桃の花はもっと薄いからね。花について書く方法を知っているなら、花の意味も知っているはずだ……………

一方、廖恩燾は「鴉片煙」と題する粵謳で、阿片の害と社会的影響を啓蒙している<sup>17</sup>。

你好食唔食，要食鴉片煙。問你近來上癮，抑或從前。我想一盞紅燈，不過系無聊慨消遣；搵個知心嚟傾嚇偈，最舒服系一榻橫眠。煙具打整得咁精良，無非為應酬起見；果然唔系噲上癮，我都由得你食一口添。點估你越食越多，你自己唔噲檢點；食到口唇黑過火炭，又試兩聳寒肩。想你茶飯三餐，食唔食都無乜要緊；總要過江龍幾口，日日至少要一兩八錢。你近來瘦骨如柴，都係自己作賤；好人唔願做，偏要做個煙精。日出三竿，你會唔會轉便；捱埋個的夜，敢就攪到五更天。問你系自己揸衰，還系鬧款；就系靚溜後生一個，弄到冤鬼咁癡纏。人怕唔系得罪你一聲，都叫你系鴉片鬼；就系恭維你兩句，不過當你系煙仙。咁好大廈高樓，你住都唔得幹淨；縱有嬌妻美妾，怕你都共佢無緣。你癮起番黎，就系美味珍饈，都唔食得一件；打完幾個喊嘍，就要口角流涎。只恨當初林則徐，唔系把個的煙來燒盡；呢陣通行十八省，重要抽到土稅膏捐。上致富貴人家，下至轎夫同著更練；官場幕友，房科差役與共門簽。武營又有將官和哨弁山，唔搓煙屎，都要吞幾粒煙丸。雖則撬起煙槍，都唔計得數掂；但系拈來當炮，怕唔敵得人地慨鐵甲兵船。睇嚇咁黑暗一個支那，怕乜你有煙點；問你一燈如豆，點照得遍世界三千。老番叫做阿芙蓉，開得時嬌艷；你好似玄壇咁慨面，重怕系火坑蓮。唉！聽我勸，戒得幾多就幾多正算，你唔聽見人地話，心堅石都會穿。

粵謳が人びとの心に響く民謡であったのに対して、新粵謳は、社会問題や政治的な主張を新鮮な文体と語彙によって訴えることを主眼としていた。新粵謳は、伝統的な粵謳と異なり、粵語の話者に向けて節をつけて歌われることよりも、新たな書きことばによって、国民に新たな思想をもたら

<sup>16</sup> 粵謳《桃花扇》選段：李銀嬌師娘演唱（<http://www.hkmemory.org/douwun/text/index.php?p=home&catId=130&photoNo=0>、2023年1月22日閲覧）。

<sup>17</sup> 《新小説》第九號（1904年8月6日）外江佬戲作〈粵謳新解心四章〉、170-171頁。なお《新小説》は、新小説社（横浜市山下町160番）、趙毓林を発行所、発行者、新民叢報社活版部（横浜市山下町160番）、岸太郎を印刷所、印刷者として刊行されている。（<https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/c/c1/新小説.第1巻第9號.pdf>、2023年1月22日閲覧）。

すことが目的とされている。この点で、社会問題や政治的な主張をローカルな声に託すことで人びとの感情に訴えようとする番客歌とは異なっているのである。

## 5. 小説「骨」

紙に書かれた文字とローカルな声とのコントラストは、伍慧明 (Fae Myenne Ng) の小説「骨」においても見出すことができる。「骨」の舞台は、サンフランシスコのチャイナタウンである。主人公レイラの父レオンは、書類上の父から父の子である権利を買い取ることで、アメリカに滞在する資格を得た「ペーパー・サン」の一人であった。そのためレオンはスーツケースいっぱいの紙を捨てずにとっている。

古銭に値打ちがあるように、こんな古い文書にも価値があり、その価値の重みは貨幣とさえ似ている。全てのレオンあての文書は、この国がレオンの居場所であることを、社会保険の係官に向けて証拠立てるはずなのだ。レオンは金を支払い、資格を買った。アメリカのドル、アメリカのドル。この書類類には、彼の時間と我慢が記されている。レオンは紙の息子なのだ[Ng, 1993: 55(77)]<sup>18</sup>。

文書が重要なのは、それがアメリカ在留資格を得るための証拠となるからだけではない。サンフランシスコの広東系移民の間では、紙に書いたものは、すべからく尊いとされる。レオンは、役所からの様々な通知（アメリカに在留するための書類や様々な不採用通知）以外にも、とるに足らない印刷物（新聞の切り抜き、ビラやポスター、日程表）や雑多な紙類を数十年分、保管している。手紙や新聞や書類は、一まとめにしてから、ある寺へ持って行って燃やし、その尊い灰をサンフランシスコ湾の知られざる場所へ捨てるというようなこともなされている[Ng, 1993: 55 (77)]。

こうした紙に書かれた文字について、主人公のレイラは、「私は紙の息子の義理の娘、スーツケースいっぱいに詰めた嘘を受けついで。どの嘘も私のもの。ここにある記憶が私の全財産。それをそっくり覚えていたい」[Ng, 1993: 58 (80)] と思っている。彼女にとって、内容が嘘に塗れていたとしても、文字の書かれた紙を持ち続けることが記憶なのである。文字が書かれた紙が、アイデンティティに関して簡潔な記録を伝達するのに対して、故郷の音の響きは、人びとの感情を喚起する。レイラである妹・オーナが自殺したのを悲しむウォンおばちゃんの話す音の響きについて、小説は次のように述べている。

（ウォンおばちゃんが）しゃべる中国語は我が家と同郷の方言で、その声音を聞いていると私も泣きたくなった。血と言われれば、自分の血を感じた。歌と聞けば歌が聞こえるようだった。長く伸びる「アー」、やわらかに甘い「シュ」のような老いた声は、まさに哀歌と言うべきだった。ほんとうにオーナをいとおしく思っていたに違いない[Ng, 1993: 116 (151)]。

文字では伝わらないこと、あるいはレイラたち広東系アメリカ人が日常的に用いる英語では伝わ

<sup>18</sup> ()内の数字は、日本語訳・イン、フェイ・ミエン 1997『骨』（小川高義訳）文藝春秋の該当ページ数。

らないことを故郷の音の響きは埋め合わせているのである。

文学的テキストとは必ずしも言えないものの、中国系移民の姓名は、文字と声の繊細なコントラストを正確に例証している。「骨」の作者、伍慧明 (Fae Myenne Ng) は、標準広東語の音韻表記で書かれているが、日本語の翻訳ではイン・フェイ・ミンという台山方言の音が転写されている [イン、1997]。「伍慧明」という漢字は、北京官話、標準広東語、台山方言 (日本語) などのローカル音を媒介している<sup>19</sup>。

同様に、私たちは、東南アジアの中国系移民が一つの漢字名に、いくつかの異なった読み方を充てているのを見つけることができる。その場合、例えば王津涯に対して、Alex Uy, Ong King, Wang など、複数の音が充てられることがある。フィリピン諸島などでは、1902年にアメリカ領となったことで、カリフォルニア州の移民排斥法が適用されるようになり、新規の中国系移民の流入が禁止された。このため新規の入国者は、帰郷して故郷で亡くなった中国系移民の書類を買い取ってフィリピン諸島に入国することがあった。このことを「登記大字」という。Uy は「黄」に対する閩南語の音であるが、王津涯は、Uy 名義の書類を持ってフィリピンに入国したため、系譜や宗親会の所属では漢字の表記でありながら、英語の表記では Uy であり続けているのである。

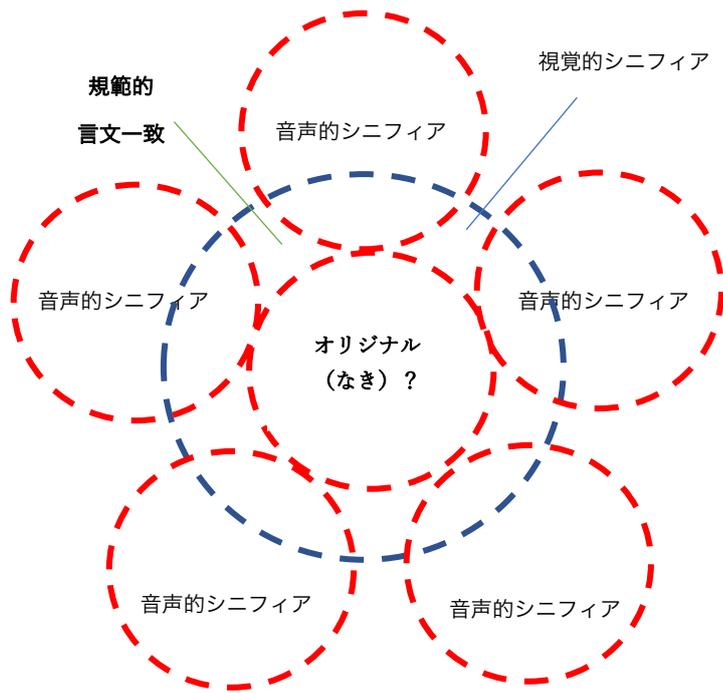
おわりに

東アジアの書記言語としての漢語は、視覚的なシニフィアンとして多様な局所的な発話の並列を許容してきた。そこで近代国民国家の礎となる国語の制定は、近代以前の官話を共通の音声言語とし、綴字法を定めて表記法を確立するのではなく、視覚的なシニフィアンとしての漢語によって許容された多様なシニフィアンを吸収しながら整備されていった。本稿で取り上げた粵謳は、もともと歌謡としてローカルな声の表現であったが、『新小説』発行以後は、歌謡としての性質を昇華させることで、白話 (口語) 的な要素を標準文法に注入するカプセルのような役割を果たした。それ以後、標準文法を備えた規範的な音声言語は、多様な音声的なシニフィアンが相互に干渉し合うなかで、クレオールとして生み出されていく。このように中国において国語が生み出される過程には、「オリジナルなきコピーの多声的並列」という状況が介在していたと言及ことができよう。

もちろん、一旦、制定された規範的な中文は、もともと「オリジナルなきコピーの多声的並列」のなかにあったさまざまな音声的シニフィアンを周辺化し、抑圧的に振る舞うようにもなる。表語文字としての漢語は、歴史的に非識字層を生み出し、識字教育によって非識字の問題がある程度、解消されたのちも、書記言語と距離のある人口を一定程度、生じさせてきた。拼音の整備や文化大革命などによって、音声言語と強固に結びつくようになった漢語は、もはやシニフィアンの多声的並列を許容しなくなり<sup>20</sup>、表音文字的な性格を強める。そうしたなかで漢字を標準的な音声で読むことのできる人たちと、発話や解釈の様式を共有していない人たち——例えば中国大陸から台湾や東南アジアに移住した移民やその子孫、中国の少数民族や少数派のスピーチネットワーク、かつて漢語のエクリチュールを通して中国と対話することが可能であった人たち——は、国語の創成期に中国においてみられたような音声的なシニフィアンの交渉の範囲の外に位置づけられるのである。

<sup>19</sup> 王德威の英語名が David Der-wei Wang、石静遠が Tsu Jin であるのも、Sinophone 的であると言えよう。筆者も「宮原」という姓の長野県におけるヨミが “Miyabara” であることから、日本語における標準的なヨミである “Miyahara” と “Miyabara”、さらに閩南語の “kiong-guân” を併用している。なお姓を表す “kiong-guân” は閩南語文語音である。

<sup>20</sup> 例えば中華人民共和国のパスポートでは、漢字の表記とローマ字表記が一対一に対応している。中華民国のパスポートもかつてそうであったが、現在では香港のパスポートと同様に、閩南語音などでのローマ字表記を選択できるようになっている。



漢語とそれを取り巻くさまざまな声との「対話」は、この意味で視覚的なシニフィアンとしての漢語を媒介とした、多様な発話の併存という意味での「対話」と、規範的な中文と周辺の音声言語が分化していくプロセスとしての「対話」の二重の意味を持つと言えよう。後者のプロセスを通して生み出されたクレオールとしての規範的な中文は、王徳威の語を借りれば「最大公約数」の音声言語である。それは歴史的に書記言語としての漢語が許容してきた多様な発話と解釈を吸収しながら、同時に、そうした多様な発話と解釈を「周辺」に位置づける。漢語のエクリチュールを間にはさんだ

音声的シニフィアンの間のクレオール的な「対話」の道は、いずれかの音声的シニフィアンがマジョリティの音声言語として再定義されることで、マイノリティのシニフィアンに対して閉ざされてしまうのである。「自然な発話」としての規範的な中文という観点から、「周辺における発話」に「不自然な発話」といったレッテルが貼られるのも、そうしたことの表れである。

そうしたなかで新たなクレオール的な対話が生み出されるとすれば、それはどのような条件によるのだろうか。本稿では、中国大陸外に居住する中国系移民やその子孫が「規範的な中文」と交渉するいくつかプロジェクトを紹介した。こうしたプロジェクトには、いくつかのタイプがある。「規範的な中文」によって周辺化された音声的シニフィアンを別の「規範的な音声言語」として定義し、「規範的な中文」と拮抗させることのその一つである。またマイナー文学、すなわち中文を用いながら、「周辺の」と位置づけられた音声的なシニフィアンを取り入れた文学を創作するというのもそのプロジェクトの一つである。そうした取り組みによって創作された文学は、規範的な中文によって生み出された支配的な言説に対するパロディとなっている場合も少なくない。

音声的なシニフィアンを取り入れたマイナー文学的なパロディが「規範的な中文」の脱構築を促すかどうかは、パロディがオリジナルなきコピーの並列のなかに位置づけられるか否かにかかっている。「対話」は、「規範的な中文」の側にとってはその他の音声的なシニフィアンを周辺化させていくプロセスであって、それを脱構築するには、オリジナルなき多様な発話の併存という状況が生み出されなければならない。そのためには、漢語、さらには *visuality* が真正性を備えたオリジナルではなく、発話を媒介する視覚的なシニフィアンとしてマイナー文学の担い手と受け手の間で共有される必要がある。今日の社会的な分断が規範的な言語の使い手（しばしば民主主義者を装う）と、周辺化された言語の使い手（しばしば権威主義者の支持者）の間に生じているのだとすれば、このようなシニフィアンの多声的な並列が民主主義のねじれを是正する方途ともなろう。

(附記) 本稿は、公益財団法人 JFE21 世紀財団 2019 年度「アジア歴史研究助成」による成果の一部である。

#### 引用・参考文献

##### 和文

- イン、フェイ・ミエン 1997『骨』(小川高義訳) 文藝春秋。
- 上田信 1992「華人の動態的把握」 可児弘明(編)『シンポジウム華南：華僑・華人の故郷』慶應義塾大学地域研究センター、89-96 頁。
- 大庭脩 2001『漂着船物語——江戸時代の日中交流』岩波書店。
- 斎藤希史 2005『漢文脈と近代——清末=明治の文学圏』名古屋大学出版会。  
—— 2014『漢文脈と近代日本』角川書店。
- デリダ、ジャック 1972『根源の彼方に——グラマトロジーについて 上』現代思潮社。
- ドゥルーズ、G.・F. ガタリ 1978(1975)『カフカ——マイナー文学のため (Deleuze, G. and Felix Guattari, *Pour une littérature mineure*. 宇波彰・岩田行一訳) 法政大学出版局。
- ハイムズ、デル 1979 (1974)『ことばの民族誌——社会言語学の基礎』(Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach. 唐須教光訳) 紀伊國屋書店。
- 兵藤裕己 2002『物語・オーラリティ・共同体——新語り物序説』ひつじ書房。
- 平田昌司 1999「目の文学革命・耳の文学革命——一九二〇年代中国における聴覚メディアと「國語」の實驗」『中國文學報』58: 75-11。
- 柳父章 1976『翻訳とはなにか——日本語と翻訳文化』法政大学出版局。
- 山口守 2006「植民地・占領地の日本語文学」藤井省三(編)『帝国日本の学知第5巻 東アジアの文学・言語空間』岩波書店 9-60 頁。
- 林少陽 2009『「修辞」という思想——章炳麟と漢字圏の言語論的批評理論』白澤社。

##### 英文

- Brubaker, Rogers 1992 *Citizenship and Nationhood in France and Germany*. Harvard University Press. (佐藤成基・佐々木てる監訳『フランスとドイツの国籍とネーション——国籍形成の比較歴史社会学』明石書店、2005 年)
- Chang, Han-liang 1988 “Hallucinating the Other: Derridean Fantasies of Chinese Script.” Center for Twentieth Century Studies Working Paper. pp.0-12.
- Clifford, James 1986 “Introduction: Partial Truths,” in Clifford, J. and George E. M. (eds.). *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press, pp. 1-26.
- 1997 *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Harvard University Press. 244-277.
- Katzenstein, Peter J. 2012 “Sinicization: China’s Rise: Ruptuyre, Return, or Recombination?” Katzenstein, Peter J. (ed.) *Sinicization and the Rise of China: Civilizational Processes beyond East and West*. Routledge. pp.1-38.

- MacKeown, Adam 2001. *Chinese Migrant Networks and Cultural Change: Peru, Chicago, Hawaii, 1900-1936*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Ng, Fae Myenne 1993 *Bone*. New York: Hyperion. (イン、フェイ・ミエン 1997『骨』(小川高義訳) 文藝春秋。)
- Noiriel, G. 1996 (1988) *The French Melting Pot*. University Minnesota Press.
- Shih, Shu-mei 2007 *Visuality and Identity: Sinophone Articulations across the Pacific*. Berkeley, CA: University of California Press.
- 2013 “Introduction: What Is Sinopine Studies?” In Shih, Shu-mei, Chien-hsin Tsai, Brian Bernards (eds.) *Sinophone Studies: A Critical Reader*. New York: Columbia University Press. pp.1-24.
- Schultz, Emily A. and Robert H. Lavenda, 2001. *Cultural Anthropology: A Perspective on the Human Condition*. (5th edition.) Mountain View, California: Mayfield Publishing Company.
- Tan, Chee-Beng 2013. “Introduction.” Tan, Chee-Beng (ed.). *Routledge Handbook of the Chinese Diaspora*. Routledge. pp.1-12.
- Torpey, John C. 2018 *The Invention of the Passport: Surveillance, Citizenship and the State*. (Second Edition). Cambridge University Press.
- Tsu, Jing 2010 *Sound and Script in Chinese Diaspora*. Harvard University Press.
- Tsu, Jing and David Der-wei Wang 2010 “Introduction: Global Chinese Literature,” in Tsu, Jing and David Der-wei Wang (eds.) *Global Chinese literature: Critical Essays*. Leiden and Boston: Brill. pp.1-13.
- Zolberg, Aristide R. 2008(2006) *A Nation by Design: Immigration Policy in the Fashioning of America*. Harvard University Press.

## 中文

- 本书编委会 (编) 2016 《闽南侨批大全》海峡出版發行集團 (全 15 卷)
- 福建档案馆 (编) 2017 《福建侨批档案文献汇编》国家图书馆出版社 (全 25 卷)
- 晋江档案局 (编) 2013 《晋江侨批集成与研究》九州出版社。
- 商务印书馆辞书研究中心 1998 《古代汉语词典》商务印书馆。
- 石獅市民間文学集成編委会 1992 『中国歌謡集成福建卷石獅分卷』石獅市民間文学集成編委会。
- 舒平 (編) 1993 『中国歌謡集成福建卷石獅分卷』石獅市民間文学集成編委会。
- 王德威 2006 〈華語語係/系文學：邊界想像與越界建構〉《中山大學學報(社會科學版)》46: 1-4。  
—— 2016 〈導言〉王德威·高嘉謙·胡金倫 (編) 《華夷風》聯經。
- 翁誌聰 2014 《島嶼叙事 台灣唸歌 (1)》國立台灣文學館。
- 現代漢語大辭典編委會 2007 《現代漢語大辭典》上海辭書出版社。
- 姚達兌 2017 「離散、方言與啟蒙——《新小說》雜誌上廖恩燾的新粵謳」『中國現代文學』31 期、59-74 頁。
- 臧汀生 1980 《臺灣閩南語歌謡研究》台灣商務印書館。
- 周定邦·林裕凱 (編) 2019 《臺灣唸歌集》國立台灣文學館。(全 8 卷)

ウェブサイト

《新小説》第九號（1904年8月6日）外江佬戲作〈粵謳新解心四章〉

（<https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/c/c1/新小説.第1卷第9號.pdf>、2023年1月22日閲覧）。

粵謳《桃花扇》選段：李銀嬌師娘演唱

（<http://www.hkmemory.org/douwun/text/index.php?p=home&catId=130&photoNo=0>、2023年1月22日閲覧）。